

## 福岡市卓球協会

【設立年月日】1951（昭26）年4月1日

【加盟年月日】1962（昭37）年1月25日

【歴代会長】

1953（昭28）年～1962（昭37）年

小野 栄

1963（昭38）年～1966（昭41）年

小森 俊雄

1967（昭42）年～1995（平7）年

森山 善七

1996（平8）年～現在

藤川 正幸

【歴代理事長】

1953（昭28）年～1962（昭37）年

森山 善七

1963（昭38）年～1965（昭40）年

川久保 辰雄

1966（昭41）年～1969（昭44）年

藤野 吉之助

1970（昭45）年～1977（昭52）年

安武 八郎

1978（昭53）年～1996（平8）年

田川 楠雄

1997（平9）年～現在

廣瀬 信雄

### 【沿革】

平成12年に、福岡市卓球協会発足50周年記念式典を開催、「福岡市卓球協会50周年史」を発刊していることで、ご覧いただければ、当協会の詳細な“あゆみ”を紐解くが出来ます。福岡市民の間に卓球が愛好され始めた時期は、大正末期から昭和初期にかけてであったようですが、協会の組織に至っては戦後を待たねばなりません。



一日中国交正常化25周年記念  
日中友好都市ジュニア卓球大会

福岡都市圏を総括する組織、登録制による協会の発足は、第3回国民体育大会福岡開催（昭23）に伴う卓球競技準備委員会が設置された時（昭22）と推測されます。しかし、国体の会場は福岡市でしたが、準備委員会は県単位で関わっていましたので、大会後、県下各地域単位に協会が設立したようです。

一方、我が国の卓球熱は、1952年のポンペイで開催された世界選手権で、佐藤博治がシングルスで、藤井・林組、西村・檜原組が男女各ダブルスで世界の王座に輝きました。その後、男子では荻村、田中、長谷川、女子では大川、江口、松崎などのチャンピオンを輩出、長く卓球王国を誇っていました。現在では、中国主導の時代が長く続いております。ヨーロッパで生まれた卓球が、昭和20年代末からは、完全にアジア主導に移行していったわけです。

こうした時流に乗って、福岡市卓球協会も歴史を刻んできたと言えます。競技人口の盛衰にもその傾向が顕著に見られます。

### 【現在の活動】その1

かつては、卓球台さえあれば、どこでも出来たわけですが、他のスポーツに比して、広大な場所は不要です。その為、数台の設置をもって、熱心な指導者により、卓球センター（卓球場）が開設され、愛好者にとっては大きな支えとなりました。現在では福岡市及び周辺を含め10数カ所が力を入れておられます。こうした条件下にあって、卓球は、他のスポーツへの憧憬によるものか、さらには電子機器等による子どもたちの拘束されない自由な趣味に流されてか、かつて程盛んではありません。勿論、少子化の影響も否めません。

優秀な逸材は学校の部活ではなく、各「センター」で、英才教育を受け進出しているのが現況です。10代から20代前半での全日本チャンピオンが排出しているのもそのよい例だと思われます。卓球に限らず多くのスポーツに、その傾向が現れております。

## 【現在の活動】その2

活動の主体は、各種大会に見ることが可能です。

❖福岡市民選手権 協会のメイン大会で、昭和29年から始まり、H27年度で62回を迎えています。

種目 カデット男女（中2以下）ジュニア男 女  
（高2以下）一般男女複・年齢別男女単

❖春秋の森山杯 男女団体・単・複

❖福岡市社会人大会 男女

❖春秋のラージボール卓球大会

❖プレージュニア、小学生大会

❖市中学生学年別大会

❖公立高校大会及び私立高校大会

❖全日本選手権予選 カデット男女単・複  
同 男女ジュニア 他の予選は県単位で

❖メンズダブルsteam卓球大会

❖ワンダフルレディース卓球大会

県大会以上の大規模大会は勿論、九州の拠点都市として福岡市での開催を希望する声の大きいことは否めません。市民体育館、九電記念体育館だけでは、限界にきており、招致出来ないのが現実となっています。上記の各大会も、各区の体育館が多く、この点では、かつて五輪招致を描いた本市のスポーツに対する関心なり構想を蘇らせてほしいものです。スポーツは、教育活動の要でもあります。その為にも新奇な施策を各競技団体は取り組もうとしています。

若年層の卓球人口が全盛期に比すれば寂しく、逆に、現在の市卓は、高齢者、中でも女性の質量に支えられていると言っても過言ではありません。



レディース委員会

\*数多くの大会を開催する為に、<事務局長（平松秀敏）事業部長（占部伊佐夫）審判部長（江上友子）>（現担当者）の各副理事長が組織を執行。

## 【見せる卓球へ】

21世紀元年、伝統ある卓球が大きく変わりました。ピンポン玉が大きくなり、サーブ権が5本から2本交替になり、1セット21本先取が11本へと縮まりました。促進ルールも変わりました。これらは、長かったゲームを大幅に短縮する効果になったのです。こうした意図が、テレビ放映（実況）にとって、より適切なものとなったわけです。基本的なルールが、ここまで改められたスポーツは他に例を見ません。もっともテレビ放映を可能にするため、ルールを改めるという意図も奇異になりませんが……。

この英断の下で、卓球ファンが増えたことも事実です。反面、プロアマの差が大きく、既述したように、英才教育を受けて伸（の）してくるプレーヤー世界を目指して育成される時代になったのです。

日卓登録組は、当然上位を狙います。その一方では競技の域を超え、豊かな人生の支えにと努める方々も増えております。今後は60代以上をさらに細分化しなければならない程に質量とも向上しており、80代、90代のプレーヤーの活躍にも注目が集まり、高齢者にとっては、ルール改正が幸いしたと言えます。一回り大きいラージボールも中々好評です。

施設に恵まれれば、市内のあらゆる場所で、ピンポンに興じる光景が見られ、市民の活性化にとって意義のあるファミリースポーツだと言えますよう。

### 【市卓球協会登録者数（県全体の割合%）】に見る現況

H24年 4,288 (42.6)

H25年 4,431 (43.5)

H26年 4,605 (44.5)

H27年 4,746 (45.2)

※ここ10年間で800人増えています。福岡県下で占める割合は、常に4割を超えており、今後もこの傾向は変わらないものと予想されます。体協50年を機に、市卓協は質量とも県をリードし、幅広い市民の交流に寄与していくものと確信いたします。